

Title	Maitrāyaṇī Saṃhitā IV 2,1 (Gonāmika章冒頭) の研究
Author(s)	天野, 恭子
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2010, 44, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/5022">https://hdl.handle.net/11094/5022</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# Maitrāyaṇī Saṁhitā IV 2,1 (Gonāmika 章冒頭) の研究

天 野 恭 子

1. 古代インドの祭式・儀礼をめぐる、儀礼の実際のやり方、それに対する議論、その裏付けとなる思想、理論あるいは古くから伝承されてきた神話等が、織り交ぜて述べられているのが *Brāhmaṇa* 散文と呼ばれる文献群である。その中でも最古のものとされる *Maitrāyaṇī Saṁhitā* (以下 MS) は、B.C. 900年頃の成立と言われ、祭式、思想、言語の研究にとって重要な資料である。MS IV 2は、Gonāmika という儀礼を扱う章であるが、現在まで、訳やこの章の内容に触れた研究はほとんどされていない。また、この章には伝承に問題のある箇所や、特徴的な語彙も多い。本稿では IV 2の冒頭を訳出し解説を加え、この章の特徴や重要な言語的現象を示したい。

2.1. Gonāmika 「雌牛の名前に関する [儀礼]」<sup>1)</sup> については、そもそも祭式文献における記述がほとんどない。*Brāhmaṇa* 散文では MS のみ、後代の祭式解釈文献でも、MS に属する *Mānava-Śrautasūtra* (以下 MŚS) のみに記述があり、同じく MS の流れを汲む *Vārāha* 派では *Pariśiṣṭa* (補遺) に記述が見られる<sup>2)</sup>。Gonāmika は *Veda* 祭式の中心をなす *Śrauta* 祭式の一つではないことから、祭式文献で扱われることが少なかったと考えられるが、その意味では、MS に記述があることが極めて異例であると言える。

2.2. 少ない資料から Gonāmika の儀礼全体を概観することは難しいが、MŚS 冒頭の数節に重要な規定が現れ、その非 *Śrauta* 的性格が見て取れる。

MŚS IX 5,5,1 *cāturhotṛkagonāmikam apy anāhitāgner dvādaśarātram trirātram ekarātram vā*. 「Caturhotṛの文言を用いる、Gonāmika [なる儀礼] は、祭火を設置していない(祭主としての資格のない)者によっても、12晩の間、3晩の間、あるいは1晩 [行われる。]

IX 5,5,2 *pākayajñopacārād agnim upacarati*. 「調理祭の手順で、火を扱う。」

IX 5,5,3 *sāmgrāmikī jayasya dakṣiṇā. saptasthavīryeṣu vāso deyaṁ, hiraṇyaṁ vā deyam*. 「勝利の際には、戦いで得た物が布施である。Saptasthavīrya [儀礼] の際には、衣服が与えられるべきである。あるいは金が与えられるべきである。」

IX 5,5,4 *revatyāṁ citrāyāṁ vā paśukāmaḥ karma kurvīta*. 「Revatī [星宿] あるいはCitrā [星宿] の日に、家畜を望む者は [この祭式] 行為を行うべきである。」<sup>3)</sup>

### 3. 和訳と解説

#### MS IV 2,1(1):20,13-21,11

(20,13-21,4) *prajāpatiḥ vā ekā āsīt. sò 'kāmayata: "bahúḥ syāṁ, prajāyeya=" iti. sá mānasātmānam adhyāyat. sò 'ntárvāṇ abhavad. sá vijāyamāno gárbhēñātāmyat. sá tāntáḥ kṛṣṇáḥ śyāvò 'bhavad. tásmāt tāntáḥ kṛṣṇáḥ śyāvā iva bhavati. tásya vā ásur evājīvat. ténásunásurān asṛjata. tát ásurāṇām asuratvám. sá yás tát ásurāṇām asuratvám véda=, ásumān ha bhávati, náinam ásur jahāti*.

「Prajapatiは一人だった。そこで『たくさんになりたい。繁殖したい。』と願った。そして、考えて、自分自身を想った。すると彼は妊娠した。彼は胎児を出産する際に<sup>4)</sup>、息をつめた。そして、息をつめて青黒くなった。それ故に [人は]、息をつめると幾分青黒くなる。その

時彼の命だけが生きていた。その命 (*ásu-*) によって **Asura** 達を [生み] 出した。だから **Asura** 達は *ásura-* と呼ばれる。だから **Asura** 達は *ásura-* と呼ばれると知る、そういう者、彼には命が備わり、命が彼から無くなってしまふことはない。」

(21,4-6) *só 'surān sṛṣṭvā pitévāmanyata. téna pitṛñ asṛjata. tát pitṛñām pitṛtvām. sá yás tát pitṛñām pitṛtvām véda, pitéva ha samānānām bhávati, yánty asya pitáro hávaṃ.*

「彼は **Asura** 達を [生み] 出した後、父親 (*pitár-*) の気分になった。そのことから祖霊達 (*pitáras*) を [生み] 出した。だから祖霊達は *pitár-* と呼ばれる。だから祖霊達は *pitár-* と呼ばれると知る、そういう者、彼は同輩達の中で父親的 [存在] となり、彼の父祖達は彼の呼びかけに [応えて] やって来る。

(21,6-8) *tásmāi pitṛñt sasṛjānāya dívābhavat. téna devān asṛjata. tád devānām devatvām. sá yás tád devānām devatvām véda, dívā ha vā asmai devatrā bhávati, yánty asya devā deváhūtim.*

「祖霊達を [生み] 出した彼に、昼が (*dívā*) 訪れた。そのことから神々 (*devás*) を [生み] 出した。だから神々は *devá-* と呼ばれる。だから神々は *devá-* と呼ばれると知る、そういう者、彼には神々の許 [へ行く際] に昼が訪れ、神々は彼が神を呼ぶ際には [それに応えて] やって来る。」

(21,8-11) *sá devánt sṛṣṭvāmanasyateva. téna manuṣyān asṛjata. tán manuṣyānām manuṣyatvām. sá yás tán manuṣyānām manuṣyatvām véda, mánasvān ha bhávati, náinaṃ máno jahāty. utá yád átīva vādaty áti vā cāratī, tíṣṭhante 'sya manuṣyā + mānuṣé.*

「彼は、神々を[生み]出した後、何だか考え込んでしまった (*amanasyata*)。そのことから、人類 (*manuṣyās*) を創出した。だから人類は *manuṣyà-* と呼ばれる。だから人類は *manuṣyà-* と呼ばれると知る、そういう者、彼には思考が備わり、思考が彼から無くなってしまふことはない。彼の言葉や行動が、多少行き過ぎた時でも、彼の [周りの] 人達は、[彼の] 人あしらいで<sup>5)</sup> 止められる。」

*Prajāpati* による創造神話にはいろいろなヴァリエーションが知られているが、その創造行為は大抵 *sarj* 「創出する」という動詞によって表わされる。ここでは「創出する」という動詞に並んで、*antārvān bhav*<sup>i</sup> 「妊娠する」、*vī-jāyate* 「出産する」という表現が現れる。男性原理である *Prajāpati* の「妊娠、出産」が語られる、珍しいヴァリエーションである。MS IV 2,13:36,3 では、神々の妊娠が語られるが、これはこの箇所の主語を入れ替えた、焼き直しであろう。

:21,8 *devatrā* 「神々の許で」のこの章での例は、重要である。すなわちここで、「神々の許で昼となる」というのは、彼が死んで神々の許へ行く時のことが意図されているのである。この文の理解のため、祭主の死後、火葬する時のことを述べた、次の箇所が参考になる：

MS I 8,6(3):124,7ff. *gr̥h̥nīyān nāktam agnīm. asuryā vai rātrir. jyōtiṣaivā tāmas tarati. dīvā ha vā asmā asmīṅl loké bhavati, prāsmā asāu lokó bhāti, yá evām véda.*

「夜に [火葬のための] 火を取り寄せるべきである。夜は *Asura* 達に属するのだ。[死んだ祭主は] 光によって闇を渡ることになる。このことを知るならば、その者に、この世界で昼が訪れ (その者にとって

この世界が明るくなり)、あちらの世界が彼に [向って] 輝き出す。]

つまり、死後、火葬の際に、死者が過たず天界に行けるよう、死者のいる場所と行先が光で照らされることが重要と考えられていたことがわかる。さらに下の IV 2,1(4)において、「死後に、神々の視力で見える」「神々の通り道がわかる」ことが述べられているが、同様のことが意図されていると考えられる。

この章に繰り返し現れる、*sá yás ... véda*の構文も、特筆すべきである。この*sá*は、ここでは、この代名詞の本来の機能を持たない。つまり、前に述べられているものを受けているのではない。また、:21,8 *sá yás ... véda, ... asmai*の文では、主文に、関係文を受ける代名詞 *Dativ Singular asmai*が現れ、そこからわかるように、*sá*は主文の主語ではない（さらに :21,4.10 *sá yás ... véda, ...enam*, :21,6.8 *sá yás ... véda, ...asya*）。そのことから、*sá*は、関係詞*yás*と同格に置かれる、いわば「仮の先行詞」であると考えられる。このような構文は DELBRÜCK, *Atlindische Syntax* (1888), 565に報告され、例えば *Aitareya Brāhmaṇa* I 1,10 *tad yad ghṛtaṁ, tat striyai payas*「溶かしバターであるそれ、それは女性の乳である」が引用される。*Brāhmaṇa*の新しい層では珍しくないこの構文は、*Brāhmaṇa*の古層ではほとんど例がないと思われ、少なくとも MS の中でも古い I、II 巻には、一例も見られない。IV 2章が、MS の中で新しい言語的特徴を示す、一つの例であると考えられる。

#### IV 2,1(2):21,11-19

*táto yá yónir udáśiṣyata, sá gáur abhavad. yónir vái námāiṣā=, etád vá asyāḥ pratyákṣaṁ náma=, átho áhuḥ: "paróḥṣaṁ" íti. prá saháśraṁ paśúṁ*

āpnoti, yá evám véda. tásyām vái páyaḥ páryapaśyaṃs. táṃ devá aduhra háritena pátreṇāmṛtaṃ. duhé 'mṛtaṃ, yá evám véda=. átha pitáro 'duhra rajaténa pátreṇa svadhám. duhé svadhám, yá evám véda=. átha manuṣyà aduhra dārupātréṇānnaṃ +vavrí. duhé 'nnaṃ +vavrí, yá evám véda=. áthāsura aduhrāyaspātreṇa srávata sūrāṃ. tè 'sravant. srávaty asya bhrātrvyo, yá evám véda. tásmāt srávata ná hástā ávanenijīta, ná pibed. ete vā asyā dóhāḥ. sárvaiv evāsyā dóhaiḥ sárvaiḥ kāmair bhunkte, yá evám véda.

「その [生み出した] 後に残った母胎 (yóni-)、それが雌牛になった。[だから] この例の (今、儀礼で用いる) [雌牛] が yóni- という名前 [になった] のだ。この [名前] は、その (雌牛の) 表向きの名前である。だが『裏の [名前] だ』という人達もいる。それを知っているなら、千頭の家畜を得る。その [雌牛] の乳を、(神々、祖霊達、人類、Asura 達が) 取り囲んで見ていた。神々はその [雌牛] を、金の器を持って [乳搾りし]、不死を搾り出した。それを知っているなら、不死を搾って得る。だが、祖霊達は、銀の器を持って [乳搾りし]、Svadhā を搾り出した。それを知っているなら、Svadhā を搾って得る。だが、人類は、木の器を持って [乳搾りし]、隠れた食糧<sup>6)</sup> を搾り出した。それを知っているなら、隠れた食糧を搾って得る。だが、Asura 達は、鉄の器を持って— [その器は] 漏れていたのだが— [乳搾りし]、Surā を搾り出した。すると彼らは、消え失せてしまった。それを知っているなら、その者の競争相手は消え失せる。それ故に、漏れた [器] で手を洗ってはならない、[何かを] 飲んでもいけない<sup>7)</sup>。以上がその [雌牛] の乳搾りである。それを知っているなら、その乳搾りのすべて [のやり方] で、すべての願いについて、結果を得る。」

## IV 2,1(3):21,19-22,13

catvāri vai nābhāmsi: devāḥ pitāro manuṣyā āsurāḥ. sārveṣu ha vā eteṣv  
 āmbho nābha iva bhavati, yā evāṁ veda. tāṁ vā akāmayanta: “māyi  
 syān”, “māyi syād” iti. tāṁ devāḥ “kāmye //” ity āhvayant. sā vā enān  
 abhyākāmayata=. ubhāye ha vā enaṁ devamanuṣyā abhikāmayante,  
 vārukā enam ārtvijye bhavanti, yā evāṁ veda. “// śrāvye //” iti manuṣyāḥ.  
 sā vā enān aśuśrūṣata=. ubhāye ha vā enaṁ devamanuṣyāḥ śuśrūṣante,  
 pūrvāsya janātām āyatāḥ kīrtīr āgacchati, yā evāṁ veda. “// ilānde //” iti  
 pitāras. tébhyo vā atiṣṭhata. tiṣṭhanty asmīn pasāvo, yā evāṁ veda=. ātha  
 yāthāsura āhvayaṁs — tébhyo vā atraśad —, yāṁ dviṣyāt, tāsya tāthā  
 goṣṭhā<sup>+</sup> āhvayet. <sup>+</sup>trāsanty asmāt pasāva. etāir evā juhuyāt (//) gonāmāiḥ  
 samśrṅgyā gōr mūrdhān pasūkāmaḥ “// kāmyāyai svāhā śrāvyāyai  
 svāhēlāndāyai svāhā //” iti. goṣṭhō vai nāmāiśā lakṣmīḥ. svē vā etād goṣṭhē  
 yājamāno bhrātṛvyasya pasūn vṛnkta. etāir vai té tā avṛñjata. tāir evāinā  
 vṛnkte. samśrṅgī bhavati; pasūnāṁ pāriḡṛhīyai.

「神々、祖霊達、人類、Asura達、というのは4つの雲なのだ。それ  
 を知っているなら、彼（祭主）はそれらすべての中で、水か雲のよう  
 になる。[神々、祖霊達、人類、Asura達は]、その[雌牛]を、『私  
 の[仲間]になれ』『私の[仲間]になれ』と欲しがった。それを神々  
 が、『望むに価する者よ(kāmye)!』と呼んだ。するとその[雌牛]は、  
 彼らに[仲間入りしたい]と望んだ(abhyākāmayata)。それを知って  
 いるならば、その者を、神々と人類の両者が[仲間へと]望み、祭官  
 [選び]では[いつも]彼を指名するようになる<sup>8)</sup>。人類は『名声あ  
 る者よ(śrāvyē)!』と[呼んだ]。するとその[雌牛]は彼らに従っ  
 た(aśuśrūṣata)。それを知っているならば、神々と人類、両方もが、  
 その者に従い、[その者が]異境へやって来る時には、彼の名声が先



に届く。祖霊達は『滋養を与える者よ!』と[呼んだ]。すると彼ら[の側]へ、[その雌牛は]止まった。それを知っているならば、その者の許に家畜達は止まる。そして、Asura達が[雌牛を]呼んだように—[そう呼ばれて]、彼らを[雌牛は]恐れたのだ—、[祭主が]嫌いな、その人の牛小屋で、その[呼び方]で[雌牛を]呼ぶべきである。家畜達は彼を恐れる<sup>9)</sup>。以上の雌牛の呼び名を伴って、家畜を望む者は、角が向い合せに生えた雌牛の額のところに献供するべきである、『望むに価する者にSvāhā! 名声ある者にSvāhā! 滋養を与える者にSvāhā!』と[呼びかけて]。これ(角が向い合せに生えていること)が、『牛小屋』と呼ばれる特徴なのだ<sup>10)</sup>。このようにして、祭主は自分の牛小屋へと競争相手の家畜達をもぎ取ってくるのだ。[上に述べた]この[呼び方]で、彼ら(神々、人類、祖霊達、Asura達)は当時[彼らの雌牛]をもぎ取ったのだ。そういう[呼び方だから]、それら(雌牛達)を[祭主は]もぎ取っていることになる。角が向い合せに生えている[雌牛]が用いられる。[そのことは]家畜達をぐるりと囲い込むことに[役立つ]。]

「4つの雲」に関する言明は、大変理解が難しい。同様の表現は、より古いSaṁhitāにも、Brāhmaṇa文献にも、一切見当たらない。唯一理解の助けとなるのは、Taittirīya-Brāhmaṇaの次の箇所である：

TB III 8,18,1-3 *āmbhāṁsi juhōti./ ayāṁ vai lokó 'mbhāṁsi./ ... yád āmbhāṁsi juhōti./ imám evá lokám ávarundhe./ ... nābhāṁsi juhōti./ antárikṣam vai nābhāṁsi./ (2) ... yán nābhāṁsi juhōti./ antárikṣam evávarundhe./ ... máhāṁsi juhōti./ asáu vai lokó máhāṁsi./ ... yán máhāṁsi juhōti./ amúm evá lokám ávarundhe./* 「水を献じる。この世界が水なの

だ。[...] 水を献じるならば、この世界を獲得する。[...] 雲を献じる。中空が雲なのだ。[...] 雲を献じるならば、中空を獲得する。[...] 広がり献じる。かの世界が広がりなのだ。[...] 広がりを献じるならば、かの世界を獲得する。」

ここでは、水、雲、広がりが、それぞれ、地上、中空、天、に対応している。そのことから、水のそれぞれの場所での状態、つまり、中空では雲、天では（気化して）偏在している状態、を表しているものと考えられる。「雲において、水か雲のようなもの」というのは、構成要素であることを表現していると考えられる。

この言明の文脈との繋がりは、この「構成要素」ひいては「仲間」というテーマによってであろう。「それらすべての中で、水か雲のようになる」と、続く文の中の「私の [仲間] になれ」には、Lokativ と動詞 *as/bhav<sup>i</sup>* という、同じ構文が現れる (DELBRÜCK, 117 を参照)。使用頻度の高い、所属や所有を表す Genetiv + *as/bhav<sup>i</sup>* の構文ではなく、ここで Lokativ が用いられることは、「構成要素/仲間」の意味合いが強いことを示している。

この節の内容は、儀礼の行為として MŚS IX 5,5,6-7 に規定されている。

#### IV 2,1(4):22,13-23,4

*yó vái cákṣuṣo víbhaktim véda, cákṣuṣmān ha bhávati, náinaṁ cákṣur jahāti. yád dívā pásyāmas, tát devánāṁ cákṣuṣā paśyāmo. 'sáu vá ādityó devánāṁ cákṣuḥ. pásyan ha vái devatrā karóti, prá devayānaṁ pánthāṁ jānāti, yá evāṁ véda. yáj jyótsnāyāṁ pásyāmas, tát pitṛñāṁ cákṣuṣā paśyāmaś. candráma vái pitṛñāṁ cákṣur. ná ha vá enam amúṣmiṁ loké cákṣur jahāti, prá pitṛyānaṁ pánthāṁ jānāti, yá evāṁ véda. yát támīsrāyāṁ pásyāmas, tán manuṣyāñāṁ cákṣuṣā paśyāma. etāvad vāvá*

*naḥ svām cākṣur. ná ha vá enam asmíṃl loké cākṣur jahāti, sárvam áyur eti, yá evám véda. yád agnér ánte páśyāmas, tád ásurāṇāṃ cākṣuṣā páśyāmā. úc ca vá eśá dípyate, ní ca riṣyati. dípyamānaṃ bhrátrvyasya grhād dhared. rayím evāsya púṣṭim haraty. á tú sūryasyódetor jāgryād. yát svapyád, ártim árchet. táj jāgaritavyāni. rayím evá púṣṭim ánujāgarti.*

「視力の変化（色々な形をとること）を知る者には、視力が備わり、視力が彼から無くなってしまふことはない。日のもとで我々に見えているものは、神々の視力を使って見えているもの [なのだ]。かの太陽が神々の視力なのだ。それを知っているならば、[彼自身の祭と布施の功德を] 見て（自分のものであると正しく認識して）、神々に示す、[また]、神々の通り道が [正しく] わかる。月明かりのもとで我々に見えているものは、祖霊達の視力を使って見えているもの [なのだ]。月が祖霊達の視力なのだ。それを知っているならば、あの世において、視力が彼から無くなってしまふことはなく、彼は祖霊達の通り道が [正しく] わかる。闇夜で我々に見えているものは、人間の視力を使って見えているもの [なのだ]。我々自身の視力というのは、実際その程度なのだ。そのことを知っているならば、この世において、視力が彼から無くなってしまふことはなく、彼は寿命を全うする。火の傍で我々に見えているものは、Asura達の視力を使って見えているもの [なのだ]。例の [神格] (Agni) は上へ燃え上がったり、下へ縮こまったりするのだ<sup>11)</sup>。燃え立っている [火] を、競争相手の家から運び出すべきである。彼の財産と繁栄を運び出していることになる。だが、[その後]、日の出までは起きていなければならない。寝てしまったら<sup>12)</sup>、事故が起こるかもしれない。だから、起きていべきである。財産と繁栄を [見守って]、起きていことになる。」

*páśyan ha vái devatrā karóti* の文が、難解であり、且つ大変重要な内容を示している。上の IV 2,1(1) に対する解説で述べたように、*devatrā* 「神々の下で」の語は、死後神々の下へ行く場面が背景として考えられていることがあり、ここでも、死後のことが語られている。そのことは、続く文の「神々の通り道」からもわかる（人間が死後に辿る「神々の道」と「祖霊達の道」については、WINDISCH, Ernst: *Buddha's Geburt* (1908), 58ff. を参照）。

*devatrā + kar* は、「神々の下に供する」「神々に示す」という術語であろう： *Taittirīya-Saṁhitā* I 7,1,6 *devatrā + dattam kar* 「与えられたものを、神々の下に供する」（KEITH, Arthur Berriedale: *The Veda of the Black Yajus School entitled Taittiriya Sanhita* (1914) ad I 7,1,6: “he (may) place among the gods what is given”); *TS* V 1,7,4 ~ *Kāthaka-Saṁhitā* XIX 7:8,21f. この箇所での *kar* の目的語は、*TS* I 7,1,6 を参考に、さしずめ「祭式と布施 [の功德]」と考えた。そのような概念を表す術語 *iṣṭā-pūrtā-* は、「[祭主が生前に行った] 祭式と布施の効力ないし功德」を意味し、祭主の死後、来世でのあり方を決定づけるものと考えられていた（阪本（後藤）純子: 「*iṣṭā-pūrtā-* 「祭式と布施の効力」と来世」、『インド思想と仏教文化』(1996), 67-87; SAKAMOTO-GOTŌ, Junko, “Das Jenseits und *iṣṭā-pūrtā-* “die Wirkung des Geopferten-und-Geschenken” in der vedischen Religion”, *Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik* (2000), 475-490)。また、*iṣṭā-pūrtā-* は祭主より先に天界に昇っているが、祭主が死後にやって来た際、自分自身の *iṣṭā-pūrtā-* を間違いなく受け取ることが重要視された。そこで、*MS* IV 2,1(4) の文における *páśyan* 「見つつ」を、自身の *iṣṭā-pūrtā-* を、神々の視力によって、正しく見極めることを表していると解釈した。IV 2,1(1) で「死者にとって世界が明るくなり、過たず天界へ行く」と述べられることと、同様のモチーフが背景にある。

競争相手の家から火を取ってくる、という行為は、祭式行為としては異例であろうが、この文に倣ってMŚS IX 5,5,8でもそう規定されている。また、火を取ってきた後、「寝てしまったら事故が起こる」ため起きていなければならないとされる。MŚS IX 5,5,8では、... *āhṛtyendhāno rātrīm jāgryāt* 「[燃え立った火を] 運び出した後、燃やしながらい一晚中起きていなければならない」と述べられていることから、「火が消えてしまう」ことを避けなければならないと考えられていたようである。「事故」として考えられていたことの、さらなる可能性としては、「火が燃え広がってしまうこと」が考えられる。例えばMS I 8,9(5):129,17ff. *yāsyāhitāgneḥ sató 'gnúr gṛhān dáhet* 「祭火を設置した祭主でありながら、その者の祭火が家を焼いてしまった場合には」を参照。背景には、しかるべき鎮めを受けていない火は危険なものであるという認識がある（それゆえに、「祭火を設置した祭主でありながら（すなわち祭火に対してしかるべき儀礼を行い、火を鎮めているはずが）」と *Partizip Präsens* により認容的に表現されている）。「鎮められていない火」については、MS I 6,5(3), I 6,7(4), I 8,5(5) などで述べられている。

4. MS IV 2,1の訳を試み、そのためにいくつもの語彙を *Brāhmaṇa* 文献全体に亘り調査した。普通そのような過程で、該当箇所に対応するパラレルな記述が他の文献に見つかるはずであるが、MS IV 2,1に関してはそのようなパラレルが一切見つけられなかった。この章がMS独自の成立を持つこと、またこの儀礼が *Maitrāyaṇī* 派だけで特殊に扱われていたことがわかる。また、その記述が思想的に重要な資料を含むことから、その成立事情は、重要性の低いものを単に後代に挿入した、というだけではないことが察せられる。MS IV 2章は、IV 2,1-14までであるが、全体を研究することによって、この儀礼、そしてこの章の、成立の背景を探ることが今後の課題

である。

### 注

\* 本稿の元になった原典研究の際には、池田宣幸氏の意見が大変有益であった。ここに感謝の意を表する。

\*\* Maitrāyaṇī Saṁhitāの原本のテキストには次の二つがある：SCHROEDER, Leopold von: *Maitrāyaṇī Saṁhitā. Die Saṁhitā der Maitrāyaṇī-Śākhā* (1881/1883/1885/1886); SĀTAVALEKAR, Ś. D.: *Yajurvedīya Maitrāyaṇī-Saṁhitā* (1988)。現在までに出版されているMS研究として、次の二つが挙げられる：MITWEDE, Martin: *Textkritische Bemerkungen zur Maitrāyaṇī Saṁhitā* (1986); AMANO, Kyoko: *Maitrāyaṇī Saṁhitā I-II. Übersetzung der Prosapartien mit Kommentar zur Lexik und Syntax der älteren vedischen Prosa* (2009)。

1) MS IV 2,1(3):22,9, IV 2,10:34,3に現れる *gonāmā-*「雌牛の名前」の語から付けられた名前である。

2) *Mānava-Śrautasūtra*では、IX 5,5-6 (Rājasūya 章の最後)として収録されているが、テキストを編集したVAN GELDERはこれは正しい位置ではないと述べる：cf. VAN GELDER, Jeanette: *The Mānava Śrautasūtra belonging to the Maitrāyaṇī Saṁhitā* (1961) & (1963), IX 5,5,1の訳に対するn.1と、テキストの序文p.5。さらに、KASHIKAR, C. G.: *Vārāha Śrautasūtra. Belonging to the Maitrāyaṇī recension of Kṛṣṇa Yajurveda* (1988), p. LIXを参照。

3) 「[この祭式は]、家畜を望む者が、R. [星宿]あるいはC. [星宿]の日に行う」の意味と、「家畜を望む場合には [特に]、R. [星宿] あるいはC. [星宿] の日に行う」の両方の意味が考えられる。MS IV 2,1(3):22,10には、*paśúkāma-*が献供を行うことが規定されている。しかしIV 2,7:29,1には、*grāmakāmaṁ yājāyet*「村を望む者に [この祭式を] 開催させるべきである」という規定が、:29,3f. *paśúkāmaṁ yājāyet*「家畜を望む者に [この祭式を] 開催させるべきである」と並んで記されている。また、家畜を望む者の星宿については、IV 2,9:31,8f. *tāsmād, yāt kīṃ ca paśūnāṃ kurvūtā, tād revatīyāṃ kurvūta*「それ故に、家畜のために行うことは何でも、それを *Revatī* [星宿] の下で行うべきである」と述べられる。

4) Nominativ Sg. m. *vijāyamānas*は、*sá* (=Prajāpati)に一致する。*vī-jāya-*が Imperfekt の定動詞として現れるMS IV 2,13:36,3も参照せよ：*devā vāi sārve sahántārvanto 'bhavāms. té sārve sahá vyājāyanta*「神々がみんな一緒に妊娠した。そしてみんな一緒に出産した。」*jāya*<sup>7e</sup>は普通「生まれる」を意味する

fientivのMediumであり、transitivの「子供を作る/生む」はAktiv *jāna<sup>ti</sup>*もしくはKausativ *janāya<sup>ti</sup>*であるが<sup>5</sup> (GOTŌ, Toshifumi: *Die "I. Präsensklasse" im Vedischen* (1987), 145f.)、*vī-jāya<sup>te</sup>*は「出産する」を意味する特殊な用法を示す。GOTŌ: ""Purūravas und Urvaśī" aus dem Vādhūla-Anvākhyāna", *Anusantatyai* (2004), 85 n.19; 後藤敏文:「新資料Vādhūla-Anvākhyānaの伝える「PurūravasとUrvaśī」物語」,『インド哲学佛教思想論集』(2004), 858, 867 n.43を参照せよ。可能性として、「[出産して]、胎児から離れた、別の状態になる」という表現がもとにあると考えられる。

Instrumental *gārbheṇa*は、*vijāyamānas*に関っていると、*atāmyat*に関っていると考えられるが、動詞 *tamī*はここでは「(分娩でいきむ際に)息をつめる」(その結果、顔色が青黒くなる)を意味することから、「胎児によって」の関りは必ずしも適切でない。そこで、*vī-jāya<sup>te</sup>*の本来の意味「胎児から離れた、別の状態になる」を補うものと考えた。*vī*がInstr.と共に用いられることについては、DELBRÜCK, *Altindische Syntax* (1888), 131; AMANO (2009), Index s. v. Instrumentalを参照。

5) 両方のEditionで、*manuṣé*となっている。VON SCHROEDERは、MS IV巻のCorrecturenで*mānuṣe*と直す(MITTWEDEを参照)。*mānuṣe*は、*mānuṣ-* m. のDativ Singular,あるいは*mānuṣa-* m. のLokativ Sg.の可能性があるが、両方の語とも「人間」を意味し、この文では意味をなさない。*mānuṣá-*は「人間の、人間に関する、人間のための」を意味する形容詞で、例えば*dāiva-* (MS III 6,1:60,4f.) / *divyá-* (MS I 4,7(4):55,12f.)「神々に属する」、*āsurá-*, *sádeva-*「Asura達に属する」、「神々を伴った」(TS II 5,11,1), *saumyá-*, *rākṣasá-*「Somaのための」、「Rakṣas達のための」(TS II 5,3,5)などの語と対になって現れる。用例の中に、名詞を伴わず、n. Sg.で現れるものがあり、それは「人間に関する[行為]」を意味している(MS III 6,6:67,4 = III 8,7: 103,12; TS II 5,3,5; II 5,11,1)。そのことから、この箇所において、*mānuṣé*「人々に関する/人々のための[行為]において」であると解釈した。

6) 両方のEditionで*vavř*となっている。VON SCHROEDERのHs. Mではアクセントなし(ただしすぐ下では*vavř*)。VON SCHROEDERがn.4で述べるように、おそらく*vavří-*の伝承によってくずれた形であると考えられる。*vavří-*はMSに一例だけ現れるが、伝承にはやはり問題がある(下を見よ)。

*vavří-*の語はRVから用例があり、辞書や文法書(BÖHTLINGK, Otto / ROTH, Rudolph, *Sanskrit-Wörterbuch* (PW; 1852-1875), s. v.; GRASSMANN, Hermann G.: *Wörterbuch zum Rig-Veda* (1873), s. v.; MAYRHOFER, Manfred: *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen* (1992, 1996), s. v.; WACKERNAGEL, Jacob /

DEBRUNNER, Albert: *Altindische Grammatik (AiG)*, II 2 (1954), 85, 300) で、すべて男性名詞とされ、「隠れ場所」等の意味があてられている。おそらく *var*「覆う」からの派生で、重複語幹に Suffix *-i-* をつけた語形であると考えられるが、この語形成は AiG II 2, 300 が述べるように Substantiv を形成することもあるが、同書の 291ff. で多くの例が挙げられているように、行為者名詞、つまり「…する」の意味の形容詞であることも多く、むしろこの意味がもとであると考えられる。すなわち *vavri-*「隠れた」(そこから「隠れ場所」)の意味は十分設定しうる。

*vavri-*の MS における例、IV 2,3:24,13 では、*eṣá vavrís* と、m. Sg. で現れるが、おそらくは *vavri-* は *eṣá* (= Agni) を述語的に形容する形容詞であると考えられる: IV 2,3:24,12ff. *asyá vá eṣá vavrír* (Ed. SĀTAVALEKAR; Ed. VON SCHROEDER もそのように直す; Hs. M *vavír*; B *vavror*, H Bb *vavróṁr*) *útsṛṣṭas carati lomaśó lomaśáyās. tásmād eṣá* (Ed. SĀTAVALEKAR; Ed. VON SCHROEDER *erśá*; vgl. MITTWEDE) *śásvasaty ety* (Ed. VON SCHROEDER がそのように直す; Hs. H Bb *śásvasaty éty*; B *śásvasaty ety*; M *śásvasatt ety*; Ed. SĀTAVALEKAR *śásvasaty éty*; vgl. MITTWEDE). *agnír hy ásyá ásyām, vátaḥ práṇás*「例の〔神格〕(Agni)は、この〔大地〕に隠れていて、解放されれば動き出す、[つまり]、草木に覆われていて、草木に覆われた〔大地〕から〔解放されて〕。それ故に、このもの(大地)は、息遣いをし続けている。火がこの〔大地〕の喉であり、空気の動きが呼吸であるから。」文脈は儀礼が行われる祭場の説明で、草の束で作った柱のところに水をかけると述べられる。その理由として、大地に隠された火が言及されているものと考えられる。それが、「草で覆われている」あるいは「大地の喉」と説明され、一方で「解放されて動く」と述べられていると考えられる。

IV 2,1 で *ánnanī* \**vavri*「隠れた食べ物」と言われるのは何か、ということであるが、考え得る解釈を挙げる。一つは「乳」であり、雌牛の体内に隠れたもの、というイメージは RV に現れている: RV IX 71,5 *gór apīcyām*「雌牛の〔中に〕隠れたもの」。あるいは「〔誰かによって〕隠された食糧」を、例えば略奪して奪うこと、あるいは「探し出すことが困難な作物など」が考えられる。MS IV 2,13:36,8ff. に、この神話の焼き直し語られるが、*vavri-*に該当する語は現れない。

- 7) MŚS IX 5,5,5 に規定として組み込まれている: *bhinnena sravatā na avanenijīta, na pibed ayaspātreṇety eke*「ある者達は『割れた、漏れている〔器〕で手を洗ってはいけない、鉄の器で飲んではいけない』と〔言う〕。」*srávant-*「漏っている〔器〕」(Gonō (1987), 338; PW s. v. を参照) に対して、分かりやすく *bhinna-*「割



れた」を補っている。

- 8) :22,3ff.の文では、*yá evám véda*に対する主文は、*ubháye ha vá enam devamanuṣyá abhíkāmayante*と*vārukā enam ārtvijye bhavanti*の二つからなる。*yá evám véda*に対する主文が、*ha vái*あるいは*ha*を含むことは、しばしばある (AMANO, Index s. v. Indikativ Präsens, 3.6.1; 上の:22,1f.も見よ)。二つの文が続くことを示すため、一つ目の文の定動詞にアクセントがあることが望まれる (規則ではない: AMANO, 34ff.を参照) が、ここでは*abhí-kāmayante*は動詞のアクセントを示さない。同様に、:22,5f. *śúśrūṣante*, IV 2,1(4):22,17f.と20f. *jahāti*. それに対して、アクセントを示す例は、IV 2,1(4):22,15f. *karóti*. また、*sá yás ... véda*の関係文が前に来る場合でも、IV 2,1(1):21,4 ... *ha bhávati*, 同様に:21,5, :21,7f., :21,9f.
- 9) 両方のEditionで、*áhvayedrásanty*となっているが、上にImpf. *atrasat*が現れていることから、ここでは*trásanti*が適切であろう。Ed. von SCHROEDER, 該当箇所 の n.5; MITTWEDE, 155を参照。
- 10) Cf. IV 2,14:38,13 *yá samśṛṅgí sá goṣṭhás*「角が向い合せに生えている [雌牛]、それは牛小屋である。」AiG II 1 (1905), 75; II 2, 377を参照。
- 11) 文脈からも、*úd ... dípyate*「上へと燃え上がる」からも、この文の主語はAgni「火」である。*riṣyati*は「損傷する」を意味することから、また、「上へと燃え上がる」との対比と考えると、*ní ... riṣyati*は火が小さくなる様を表現していると考えられる。
- 12) 写本は*svapyád*の読みを示すにもかかわらず、von SCHROEDER, SĀTAVALEKARとも、\**satyád*と直している。*svapyát*はWurzel-Präsens *svápiti*のOptativ: MITTWEDEに挙げられた文献、さらにGotō (1987), 344を参照。

(文学研究科非常勤講師)

## RESÜMEE

## Über Maitrāyaṇī Saṁhitā IV 2,1 (Anfang des Gonāmika-Kapitels)

Kyoko AMANO

Die Maitrāyaṇī Saṁhitā (MS), die um 900 v. Chr. verfasst wurde, enthält die sogenannte Brāhmaṇa-Prosa, die aus Erklärungen bzw. Diskussionen über Ritualpraxis, diese unterstützenden Theorien und alten Mythen besteht. MS IV 2 behandelt das Gonāmika “[Ritual] mit den Namen der Kuhe” genannte Ritual, das sonst kaum in der Ritualliteratur beschrieben wird: nur die MS und zwei zu ihr gehörige kommentarartige Texte, das Mānava-Śrautasūtra und das Vārāha-Pariśiṣṭa, behandeln dieses Ritual. Es gehört nicht zum Śrauta-Ritual, das von einem qualifizierten Opferherrn und meistens mit mehreren eingeladenen Priestern veranstaltet wird, und ist wohl deshalb nicht sehr beachtet; desto seltsamer ist es, dass dieses Ritual in der MS vorgeschrieben wird.

In meinem Aufsatz wird MS IV 2,1, der Anfang des Gonāmika-Kapitels, übersetzt und erörtert, und zwar mit einem Kommentar zu inhaltlichen und sprachlichen Besonderheiten.

キーワード : Maitrāyaṇī Saṁhitā, Gonāmika, devatrā, mānuṣá-, vavrí-